

# わがむらの昔ばなし

## 明治時代の我が農村の食生活

昔の農村は、一部の地主階級を除いて経済的に恵まれず、『働けど働けど我暮らし楽にならざりじっと手を見る』石川啄木の歌の節で、生活は苦しく悲惨の極であった。

農機具の発達は未だ緒に付かず、農作業は昔ながらの手作業が主で、能率は悪く、労力を要すること夥しかった。生活に時間的余裕が生ずる筈もなく、何時も忙しかった。

加えて栄養学の研究は進んでおらず、まして一般農家の知識たるや皆無に等しき状態であった。只腹が太ればそれで良し、麦飯に漬物、お茶漬、さぶさぶで、早く食べて農作業に精を出せば、模範的農民として自他共に認め、誇りとした時代であった。

早飯食いは軍隊教育が大きく影響した。軍隊は万事戦闘を基準として教育された。もさもさ食べていたのでは間に合わない。軽便な者は一分間遅鈍な者でも五分位で食べ終えねば到底ついて行けなかつた。

た。この教育が農村にも浸透して早飯となった。

主食は米六、七割に麦三、四割混入が普通であったが、麦五割以上混入する農家も決して珍しくはなかった。こうして少しでも米を余し現金に換えねば、暮しが成り立たなかったのである。

副食は漬物が主であったがそれに煮しめか、なますが一品付けば上等である。沢庵漬を四斗樽に何丁も漬け誇りとした。煮しめは、大根に人参里芋等を入れ、大鍋で大量煮て、冬期なら同じ物を二、三日ばかり食で有難く頂いたのである。なますは鯛か鯖の

身を少量入れた大根かチンヤなますが多かった。

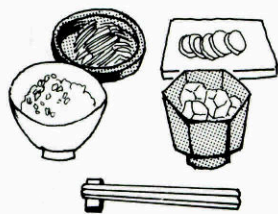
鯛刺身は時たま食べるのが出来たが、他の刺身はお祭りか来客の際でなければ見ること出来なかった。

牛乳や卵は、病人の食べる物で健康な人間の食べる物ではないと信じていた。鶏を少羽数飼育している農家は可成りあったが卵は全部売って家計の足しにした。

肉類は販売する所も殆どなかったが、農家が食卓に乗せることは、潔癖なる農家の信仰心が許さなかつた。

現在の様に養殖事業は開発されておらず、魚介類は量・種類共少く、価格も高価で到底庶民の口を満足させることは出来なかつた。

結局は蛋白質の不足となり大変な結果となったのである。蔬菜も当時は甘藍・玉葱・トマト・ピーマン等の西洋野菜は栽培されておらず、果実類も少なく、ビタミン、緑黄野菜なんて言葉も聞いたこと



## 町民文芸

### 俳句

#### 清風句会

七月定例

遠足の列の乱れや毛虫這ふ  
田村 九重

半夏至岩場に立てり露天風呂  
高崎はま子

牧草に風遊ばせて半夏至  
藤木 常

噴水の高さを誇る半夏至  
笹見 梅雪

摩周湖の瑠璃色に佇ち夏寒し  
上田 雪子

禅寺の谷を鳴らして半夏水  
沖村美智子

栗色の背中まるめて毛虫這ふ  
岡 松月

海底の暗しとなげく梅雨の海女  
池田 久子

美しく着飾る毛蟲弄てもせず  
山崎 菊女

降り続く雨靴重し半夏至  
岩本さつき

ホトトギス谷を渡りて映明けぬ  
山野たけ子

存分に雨を降らして半夏生  
山中 重女

最果ての原生花園の夏寒し  
宮永ミネ子

目にふれば命短かし毛虫衆  
仁保 民子

うす雲にほのかに日差す半夏至  
因藤 免史

本堂の畳を這える大毛虫

選者追吟  
永田 石山

### 短歌

#### 三隅短歌会

七月作品

帽子紐らぎればかりに風受けて梅雨明けの坂自転車を下る  
岡 松子

土砂降りに濡れて歩める白犬のその一匹の去るを見送る  
立間 雅子

青梅のほのかな香りがきながら水けふきとり嫁と漬け込む  
田中 朝子

病みつきてひとり静かに梅雨雨を見れば雫のしたたる軒端  
久行 コト

朝な夕なゲートボールの球音の耳に鳴りしがけさもまた雨  
平川 育子

あじさいの露を含みて咲き盛る梅雨の晴れ間の光の中に  
古屋 博子

やぶ刈りを終えてくつろぐ湛り辺に吹きくる風のいたく涼しも  
堀 光太郎

日は落ちて山肌深く翳りゆき寂まる中にひぐらしの鳴く  
吉村 恵子

暮れなずむさつき原野に行き逢ひて白き衣着し人と語りぬ  
安藤 芳江

現し世の生きはとおとし絆ひく生親に会える夏の来にけり  
石村 栄助